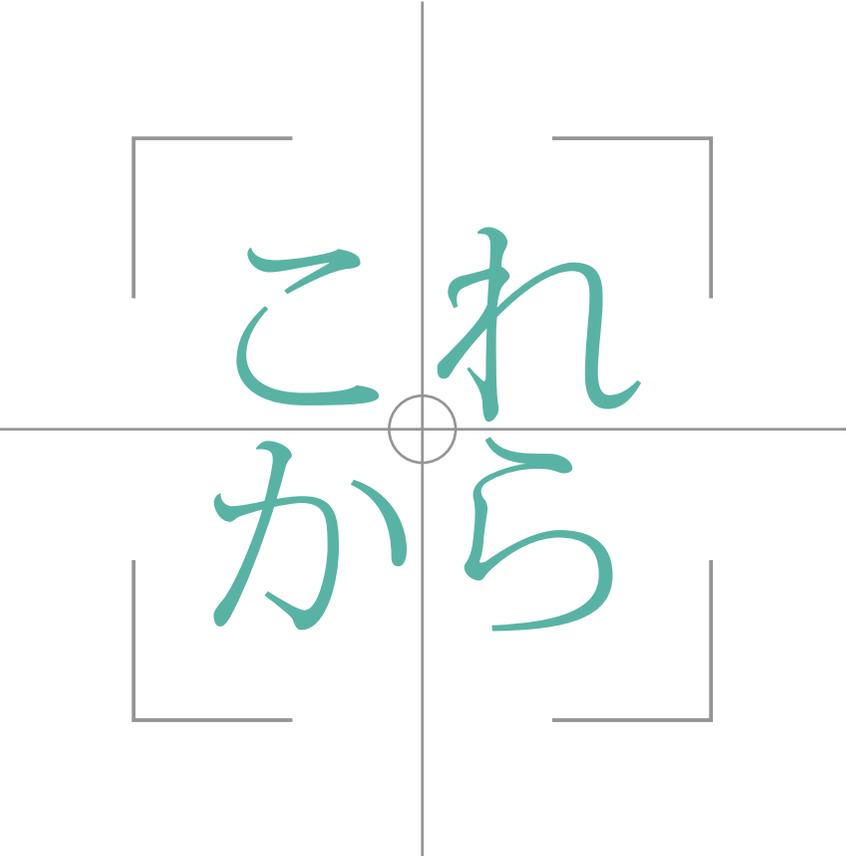


TOYONAKA
CITY
ART
EXHIBITION

70th

ANNIVERSARY



これから

豊中市美術展第70回記念誌

市長挨拶	2
教育長祝辞	3
実行委員長挨拶	4
市展ポスターの変遷	5
ARCHIVE 市展の歩み	6 - 8
創生期から今日まで	9
座談会「市展のこれから」	10 - 12
私と美術展	13 - 19
ARCHIVE 美術協会の歩み	20 - 21
三賞受賞者一覧	22 - 27
年表	28 - 31



芸術作品の創造や鑑賞の機会を創出し、市民の美術振興と芸術向上に寄与するために開催している豊中市美術展が、今年で70回の節目を迎えました。長年にわたる市民の皆様のご理解とご協力に、心より御礼申し上げます。

終戦後の混乱の中、文化を基軸に復興を図ろうという機運の中から昭和30年（1955年）に始まった豊中市美術展が、近年ではコロナ禍による開催の危機もありながら、これまで途切れることなく実施することができましたのも、関係者の皆様の厚いご支援の賜物と感謝申し上げます。とりわけ、第1回から本市とともに豊中市美術展を主催し、現在も実行委員会の中枢を担っていただいている豊中市美術協会におかれましては、毎年の会員展の開催をはじめ、本市の文化芸術の振興に多大なるご貢献をいただいております。

現在の豊中市美術展は、作品公募では豊中市内はもとより周辺地域などからも、合わせて400点近いご応募をいただいています。また、審査を経て決定した入選作品による展覧会には、毎年延べ3,000人を超えるご来場をいただいております。本市の秋を彩る芸術の祭典として定着しております。

本市は「人と文化を育む創造性あふれるまち豊中」をめざすべき姿としてさまざまな施策を進めており、豊中市美術展にご参加いただいている皆様一人ひとりの地域に根差した活動こそが、教育文化都市・豊中を支えてくださっていると確信しております。

今後とも引き続き、豊中市美術展が市民の誇りとなるような展覧会として継続できるよう、尽力してまいります。



豊中市美術展が、記念すべき70回の節目を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

昭和30年（1955年）に豊中市美術協会の誕生とともに始まりました豊中市美術展は、芸術文化の祭典として今日まで継続・発展してまいりました。その運営に多大なご貢献を賜っております豊中市美術協会の皆様をはじめ、力のこもった作品を出展してこられた皆様、ご支援をいただいたすべての関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

本市はこれまで、教育文化都市として高い評価を受けてまいりました。このことは芸術文化を愛し、育ててこられた多くの市民の皆様を支えられてきたものであり、あらためてそのご尽力に深く敬意を表し、感謝を申し上げます。

3年以上に及んだコロナ禍では、さまざまな社会活動が制約されましたが、私たちの日常生活における芸術の大切さ、ありがたさをあらためて感じたところです。今回の第70回美術展では、30歳までの方の作品を表彰する「U30とよなか賞」を新設されるとお聞きしています。若い世代の作品にスポットを当てることは、長い歴史を紡いできた豊中市美術展をさらに未来へとつなげる有意義な取組みであると感じています。新しい感覚・感性の作品に出会えることを楽しみにしています。

結びに、本市の芸術文化のさらなる振興と、豊中市美術展ならびに豊中市美術協会の今後益々の充実・発展を心より祈念申し上げ、私の祝辞といたします。



豊中市美術展は今年で第70回の開催を迎えます。豊中市美術協会も時を同じくして発足し、豊中市美術展とともに70年の歴史を歩んでまいりました。

豊中市美術協会の近年の活動として思い出されることのひとつは、2012年に服部緑地内の日本民家集落博物館で開催した会員展です。梅林や竹林、池、風車などの風情ある会場で、重要文化財である古民家に作品展示をすることができ、多くの方にお越しいただきました。

次に、大阪大学附属病院での作品展示です。病院からのご提案を受け、奥野前会長が調整を行い実現したもので、同じく2012年から継続して開催しております。展示場所は病院の受付と売店の中間にあり、患者さんや病院の先生、職員の皆さんには憩いと安らぎの場として喜ばれています。

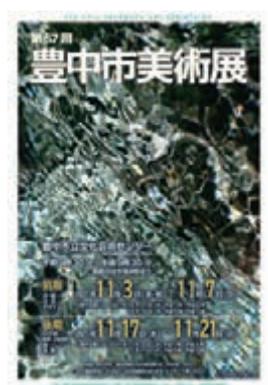
長い期間会長職を務められた前会長の功績を大切に引き継ぎ、現会長、副会長をはじめ会員一同は、日々自己研鑽に励んでいます。ひとりひとりが豊中市の文化芸術振興に向けて考え取り組んだ結果、市美術展は第70回を迎えることができました。

市美術展は、それまで会場となっていた市民会館の建て替えに伴い、第56回（2010年）からローズ文化ホールや大阪国際空港ギャラリーでの実施を経て、豊中市立文化芸術センターの完成した第62回（2016年）以降は現在の形で開催しております。また近年ではコロナ禍で開催が危ぶまれたこともありましたが、工夫を重ね毎年開催することができております。

第70回開催にあたっては、市民ギャラリーでの企画展「豊中の作家たち70年を振り返る」の開催や本冊子の発行など、記念事業も企画いたしました。市民の皆さんはもちろん、美術を愛して止まない人たちに支えられている市美術展をますます応援していただけますようお願い申し上げます。そして会場にも足を運んでいただければとお祈りし、挨拶いたします。

市展ポスターの変遷

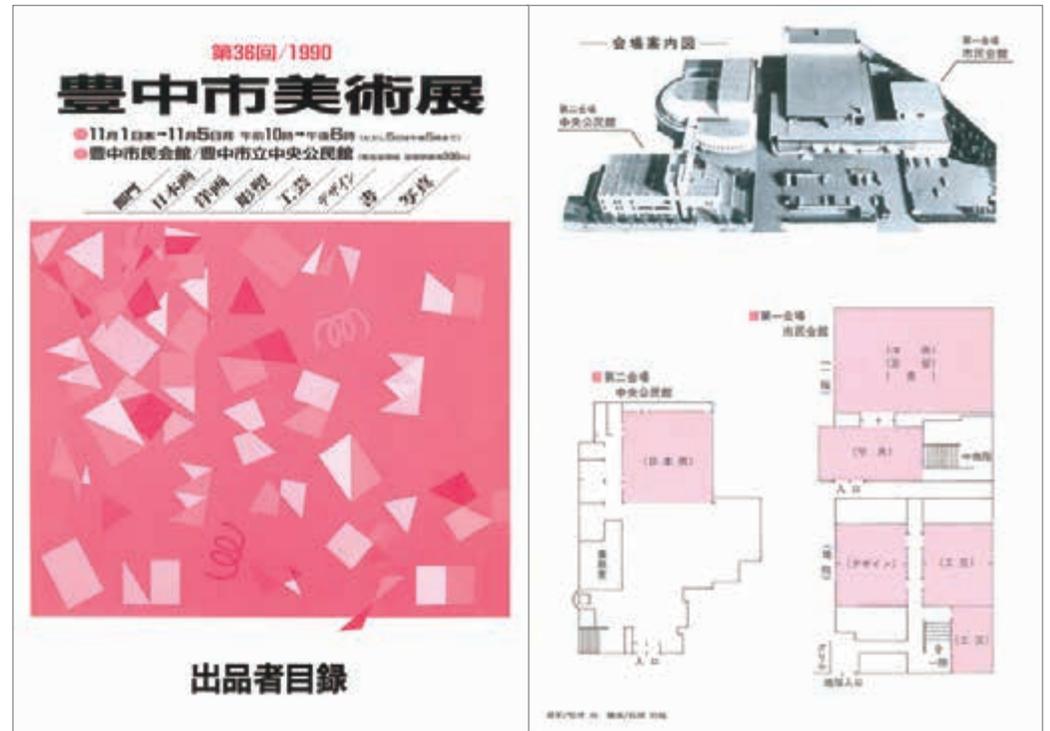
2004年 第50回展～2024年 第70回展



ARCHIVE 豊中市美術展の歩み



第8回展 1962年
この年竣工の市役所新庁舎6階で開催。



第36回展の目録より抜粋

旧豊中市市民会館での市展
第14回展(1968年)から
第56回展(2010年)まで
旧市民会館で開催。



第51回展

ローズ文化ホール&大阪空港展

旧市民会館が老朽化で建て替えになり、第57回展（2011年）から第59回展（2013年）まで公募の部を豊中市立ローズ文化ホールにて、会員の部を大阪空港中央ブロックにて開催。



第58回展(2012年) ローズ文化ホール会場(公募の部)



第58回展(2012年) 大阪空港会場(会員の部) 会員の部の会場では友好都市、島根県隠岐の島町より出品写真も展示。





第62回展(2016年) 展示室会場



第64回展(2018年) 表彰式

文化芸術センター展

第62回展(2016年)に新しく竣工した豊中市立文化芸術センターでの開催がスタート。展示室、多目的室、2階回廊などで展示。表彰式も同館の小ホールにて開催、現在に至る。



第62回展(2016年) 2階回廊会場



第65回展(2019年) 多目的室会場

審査員作品展「とよなかの作家たち」

市展への関心を高めてもらうために2014年～2019年まで豊中市立市民ギャラリーにて開催。



2016年

創生期から今日まで

洋画部 高橋雅子

ある朝、登校すると教頭先生が「直ぐ校長室に」と呼びに来られました。

私は何事があったのか？とても不安な気持ちでついていきました。校長室に入ると新聞記者とカメラマンが待っておられ、豊中市展に初出品で初入選したことを知りました。

翌日の新聞に、第一回豊中市美術展の変わり種コーナーに最年長者として堀口清良氏（第3代美術協会会長）、最年少者として高校一年生上村雅子（現・高橋）と大げさな見出しで載っていました。その記事を見て嬉しさより気恥ずかしい思いが強かったのを覚えています。

昔から「継続は力なり」といわれ、何事も10年継続すれば一つの歴史ができると言われていますが、私の場合はそんなに大げさなことではなく、好きな絵を毎年画いて市展に出品していたら70年経っていたということで自分でもびっくりしています。

旧友に逢うと「まだ絵を画いているの？」とか「高橋さんは幾つから画いているの？」とよく聞かれます。私が絵の世界にはまったのは多分、小学校5・6年の頃からだと思います。小学校の受持ちの先生が美術科出身で、休みの日になると写生大会によく連れて行ってくださいました。そのせいか私は写生がとても好きでした。6年生の時、宝塚遊園地で描いた作品が全国児童コンクールで文部科学大臣賞を頂きました。大人になった今でも自然の中に行くと思議な解放感が魔法のように私を包んでくれて、とても幸せな気分になります。

高校に進学すると美術の先生が、豊中市展の審査員をされていた日本画の鶴崎熊太先生でした。先生は身体がエネルギーの塊で出来ていて、情熱が溢れ出てくるような素晴らしい方でした。鶴崎先生の勧めで、美術クラブで画いた25号の静物画を豊中市展に出品しました。第三回展では洋画と日本画の両部門に出品、運よくどちらも賞をいただきました。

結婚後も子育てをしながら出品を続けていました。子どもが小さい時は乳母車の屋根の上にキャンバスを積んで、墓地公園の銀杏や緑地の睡蓮を描きに行ったことを思い出します。高校生の時に東光会の平通武男先生とお会いし、そのご縁で東光展に挑戦することになりました。服部緑地で睡蓮を画いた80号の絵が50周年記念東光展で入選し、東光展にはその後40年間出品を続けています。平通先生の理念は「自然に学び自分の眼でしっかりと見て現場で画くこと」でしたので、キャンバスを自転車に載せて朝早く服部緑地まで通っていました。この睡蓮の絵は以前、豊中市役所のロビーにも飾られていました。

この齢になるまで描き続けられたのは、第一に私がずっと文化都市豊中に住み続けていたこと、第二に私が住んでいた周りには偉大な芸術家の先生方がたくさんいらしたこと、第三は豊中市の職員の方々が豊中市展の為に我々会員を盛り立てて献身的なお世話をしてくださったこと等、好条件が重なり、最高の環境ゆえに70周年を迎えることが出来たと感謝しています。

後、何年続けられるか解りませんが、自然の中に身を置きキャンバスに向かう幸せを一日でも永く続けられたらいいなと願います。

最後に、豊中市展の益々のご発展を祈っています。



第1回展(1955年)での出品作



現在の制作風景



第4回展(1958年)表彰式(前2列目の右から5番目が筆者)

座談会 「市展のこれから」

豊中市美術協会の各部から会員の代表者が集まり、市美術展などの今後について意見交換が行われました

平成16年の第50回展から今日までを振り返って

水谷 過去には広報誌に会員による風景スケッチを連載したり、服部緑地で写生大会を一般の方たちと行ったりしていました。平成16～17年には美術協会による中学校での移動美術展がありました。

井崎 移動美術館は、中学校の空き教室をうまく活用できないかとのことで市の担当者から話があり、平面作品は一応全部門から参加してました。会場づくりは大変だったと思います。全中学校ではなかったようですが、多くの生徒に見ていただいたようです。将来的には移動美術館の車で市内を回ればという話があったんですけど、現実にはならなかった。

水谷 キッチンカーみたいな感じで斬新ですね。

大野 われわれ彫塑・立体造形部は出品できなかったんですが、かわりにワークショップをやりました。教室全体にビデオテープを貼り巡らせて。やはり中学生が作家と一緒に作品づくりを体感できる機会があったというのは大きかったんじゃないかなと思います。(15Pの写真参照)

篠原 そのとき十八中の美術部の生徒さんたちが全員参加してくれて、顧問の先生が美術協会会員だったのですが、和気あいあいといい思い出だなと思います。

水谷 かつて美術協会が美術館建設促進運動をやっていたときに、田中健三先生が若い人を集めて会議をしていたそうですね。

井手 美術協会の若手作家による勉強会が月1回1時間程度。内容は美術館構想のことが主で、青写真も、予定地もあるということで、推進会議をしましたが、結局美術館

構想は立ち消えとなってしまいました。

藤森 教育委員会が事務局だった時、市民や子どもたちとの活動が企画されて。私も子ども向けのイベントをしていた時期もありました。私も副会長として7～8年ほど携わり、当時の奥野会長と一緒に民家集落博物館や大阪大学医学部附属病院での展示など、いろいろなことを考えました。作家にとって運営や企画というのは難しく、悩んでいた時期でした。

水谷 洋画部では、50周年の時には会員が70名ほどで、さまざまな企画をやって会員も参加できたんですが、現会員は33人と半数以下になり、誰かがワークショップなどを頼まれたときになかなかできないという状況があります。

井崎 やはり、人が足りないというのは事実ですよ。かつては教育委員会が市民に学習の機会を提供するというのと、私たちが若い人たちに活動をしたということが一致して、WINWINの関係だったと思うんです。

水谷 私が市展に応募するだけでなくなぜ会員になろうと思ったかという、美術協会がいろいろなことを市とともにやっていたというのがあったので、それは大きな魅力の一つだったと思います。最近は美術協会がやってることといったら、市展、会員展と、阪大附属病院の展示くらいしかないの。

藤森 若い人をとというのは、今どんな団体であれみんなが悩めることだと思います。もう団体展やコンクール展で入選しなくても、デジタル上でいくだけでも世界にアピールできる時代だから。そういう人たちに目を向けてもらうにはどうすればいいのかが課題ですね。



水谷和子
(司会/進行 洋画部)



井崎敏彦
(デザイン部)



藤森秀子
(日本画部)



守實直之
(写真部)



岡 慶泉
(書部)



井手津久雄
(工芸部)



渡辺雅夫
(工芸部)



大野良平
(彫塑・立体造形部)



篠原克治
(彫塑・立体造形部)

ジャンルの垣根の問題

- 水谷** デジタルに特に関わっているのって写真部やデザイン部だと思うのですが、いかがですか。
- 守實** 業界でも、デジタル加工したものをどこまで写真とみなすかというのは問題になっていますが、各コンテストでも徐々に認知されつつあるのが現状でしょうか。
- 水谷** デザイン部の徳河先生から伺ったんですが、公募展で漫画を受け入れているところがなかったと、そこで豊中市展は受け入れてもらえ会員になれている。
- 井崎** デザインは幅が広く、難しいのはAIの時代に特に平面デザインは、人の手を通さずできるが増えるのではと。漫画は独立した分野になっているので、出品を受け入れても、漫画を審査できる人がいないと、結局出してはくれない。難しい問題も抱え、デザイン部はいつまで残れるかという不安もあります。
- 水谷** 部門の境界という点では工芸部と彫塑・立体造形部でも課題があるかと思えます。
- 井手** オブジェ的な陶芸作品は工芸なのか、それとも彫塑なのかという問題があって、一応工芸部でも受け入れるのですが、応募者が結構彫塑に流れるんです。
- 大野** 確かにオブジェ的なのであれば歓迎です。彫塑・立体造形部で最近困っているのは手工芸的な作品ですね。線引きに頭を悩まします。
- 水谷** 書も判断が難しい作品があると聞いています。
- 岡** 書は伝統的な分野ですから、そのあたり難しいですね。墨ではなく絵の具で書かれているものを書と認めるかどうか、悩んで話し合いをしたことも。
- 藤森** 日本画部はもうなくなるんじゃないかと心配するくらい、日本画をやる人が少なくなってきて。最近はアクリル絵の具で描いた洋画やデザインのような作品も多く、講評時に聞くと墨や岩絵具も少し使っていると。悩みます。
- 水谷** 随分前から現在の7部門が時代に合ってるのかどうかというのは、いろいろ議論がありますよね。

渡辺 芸大に教えに行ってますが、最近の学生の卒業制作の傾向もジャンルの垣根が低くなってきてます。例えばデザイン学科では、3Dプリンターで立体作品を作ったとしても、プロダクトデザインというよりグラフィック志向だったり。彼らの自由な活動の姿と、今の7部門がリンクするのかなと。

井崎 30年ほど前のコンクール展で立体でも平面でもどんな技法でも構わないというものがあり、審査員も全体の講評ができる人を集めてました。だけどそれと同じことをやろうと思ったら、今の7部門は全部潰さなきゃいけない。今まで市の美術展としてやってきているのに、市民が参加できるのかということになる。それを考えると、市展についてはやはり従来の7部門の中で、受け入れられるものは受け入れられますよという形がいいかなと。

藤森 そうなると、前衛的な若い人たちがなかなか入ってこなくなりますよね。

井崎 他の団体の展示を見に行ったりしますけど、会員さんの方が前衛的で、なぜか若い人の方がどちらかといえばと旧態依然としたような雰囲気のことも多い。会員さんは比較的自由に作品を作るので、豊中市展でも、若い人が会員さんの作品を見てこんなことしてるなど、それで自分の立ち位置も変えていこうという人が出てくる可能性はあるんじゃないかなと。



市第二庁舎会議室にて

大野 若い人も基本的にはそんなに前衛的というわけではないと思っています。市展はコンクールではないので、やはり市民が美術に親しんでもらおうということが第一。その中で若い子たちも、あ、面白いなと思ったら出すでしょうしね。

水谷 7部門は古くさいですが、私は古くさい方がいいと思っているんですよ。洋画の特に昔の審査の先生は、アカデミックで伝統的な油絵の先生が多く、学生の時はそういう作品に憧れて出品して、今全然違う絵になってるんだけど、それでいいと思うんですよ。ただ会員になってからの努力が足りないという意見はすごく痛いところですね。

渡辺 市展で市長賞をいただき会員になっても、表彰された作品に縛られて、そこから変化していかない作品が多いかなと。いかに変わっていきけるのか、そしてそれを会員展などでアピールする、そういうことが必要な感じがします。

若い人への対応

藤森 井崎さんが美術協会活性化事業検討委員会を開いて、若い人の賞を作ることになり、若い人たちが集まってくれば、それが発展し、美術協会も変わってくるんじゃないかなと思います。

水谷 若い人を集めるだけじゃなくて、そのあとのつながりはどうなのでしょう。私自身入ってから作家の先生方とお話をする機会が増え、作品を見る機会も増え、何よりの勉強でした。やはり美術は人の交流だと思うので、若い人たちに情報をもっと発信しないといけないと思っていますが、進展しません。

篠原 若い人向けの賞も以前から検討はしていて悩みながら、先延ばしになってしまった。今回新しくU30とよなか賞を創設したのはいいことだと思います。

市との協力関係をもっと拡充させる

水谷 以前井手先生が地方のアートプロジェクトのチラシを持ってきて、常任委員会の時に豊中でもやりませんかとおっしゃったことが印象に残っていますが、実現しませんでした。

井手 岡町の商店街がシャッター街になっていたことがあって、そこに作品展示したらどうかなとか。ちょうどその時に木津川アートを見に行き、これは面白いなと。

藤森 豊中には例えば西福寺の伊藤若冲の国宝級の襖絵がありますが、こんなのがあるということアピールし、それに絡めて展示やイベントをやるってような企画を考えてくれないかと何回か市にお話ししましたが、それきり。やっぱり市と一緒にやっていけるような体制を作っていってほしいと思います。

水谷 会場だった市民会館（現・豊中市立文化芸術センター）が建て替えの時に、大阪国際空港で市展をやりましたね（平成23～25年）。あの空港展というのはすごく意義のあることで、たくさんの方に見ていただきました。その時に交流のある隠岐の島町からの出品もあり、空港のある豊中市ならではだったと思います。

井崎 学校では、特に美術系はものすごく授業の時間が減って、先生も少なくなっていたり。先生の負担を減らすために美術協会としてもやれることがあるんじゃないかなと。

藤森 皆さんの話を聞いてると、70年間続けてきた豊中市展で育てられてきた今の形ってというのは、やっぱり残しておかないといけないってこともわかりました。でも、今のような状態ではだんだん低迷していくと思うんです。

井崎 少しずつ変わってきていると思いますよ。例えばデザイン部もね、会員展で皆さんにデザインとはこういうものですよとお話しする時間も設けました。そのことで反応してくれる人も出てきました。会員が高齢になってきましたけれど、説明とか見方とかを話す場を提供することは、やろうと思えばできますよね。「U30とよなか賞」もできて、少しずつ前を向いているから。市にも協力してもらって、できることを積み重ねていったらいいと思います。

水谷 そろそろお時間です。本日はありがとうございました。

藤森秀子

50周年（平成16年）以降、美術協会は改革に向けて、会長は会員の中から選出、会則の見直し、会員の活動の場を広げるための委員会の立ち上げ等豊中市と協働して取り組んできました。組織運営の課題の深さ、困難さを痛感しております。

豊中市展に於いては年々老齢化が進み、応募数や会員数も減る一方で、マンネリ化してきています。生きていくためのモチベーションになっていると考えるならそれなりの役割を果たしています。又、生涯学習的な意味でも豊中の文化芸術を支えていると云えるのかもしれません。しかし前進するためには課題である若い世代の人達との繋がり、育てる事が大事です。

市展には長い時間の中で熟成してきた歴史があります。70周年を機に会員は誇りと熱意、気概をもって「これから」を考えるべき時だと思います。

國方盛行

豊中市美術協会は1955年（昭和30年）創設されました。私は第8回展から入会しましたが、世の中もまだ落ち着かなく、変革していく時期だったと思います。そんな時代に企画・創設された方々の当時の想いと熱情に敬意を表します。私は以前から「幼・小・中・高校生」たちの美術活動に興味があって、どのように関わっていくか、特に「子どもアート展」「中学校移動美術展」「高校生アート展」などに参加させていただきました。幼・小・中・高生の若いうちに於ける、芸術との出会いは人格の形成に重要な意味を持っています。しなやかな感性を持った幼児期から美的関心を育てていかなければなりません。芸術への情熱が特に強くなるのは青年期（15～17歳）です。なぜなら青年期は豊かな想像力があって、それを精神的な生き方とか、表現にまで高める感性を持っているからです。こうした感性を育むということが欠かせないと思っています。

片岡繁美

展覧会は自分の作品を少し離れたところから見る機会だと思っています。

教授の一声で何故か豊中市が勤務地となって、気が付くと中学校の美術科担当になっていたこと。それがこの地の市展に出品することになった理由です。それまでは100号、150号の大きい作品しか描いていなかったのですが、50号は“ちょっと小さいなあ”という感じでしたが、秋の作品制作はそれなりに面白かったし、美術教師として自分の作品を出品することには意味があると思っておりました。

それから随分時が過ぎて少し市展にかかわるようになって、今は自分の目と心を通して作品を創りあげていくことの楽しさを、たくさんの人に伝えられたら・・・とそのようなことを考えています。そして市展がそのような活動の場になることを願っております。



2020年第65回展日本画部門会場

廣瀬正明

今から55年前、豊中二中に入学した私は、部活動を何にしようかと考える中、運動は苦手だし好きな美術のことをしたいと思いました。しかし当時の二中は美術部として絵画、デザイン、彫刻の3つの部に分かれていました。結果、私は絵画部に入りました。三人おられた美術の先生がそれぞれの顧問をされていて、いずれもクセの強いそして何よりも美術協会のバリバリの先生方。作品活動はすごい！の一言でした。（ちなみに絵画は田中哲先生、デザインは有本先生、彫塑は湯田先生でした）私は市展や先生方の作品展等で作品を知っていく中で、こんな作品作ってみたいといつしか思うようになりました。そして気がつけば同じ道を歩んでいたのです。最初の頃は市展に出しても出しても落選ばかり・・・今では懐かしい思い出です。現在、細々とですが作品を作る事を続けていてよかったと思います。しかしもっと描かなあかんで一と言われそうで、もうひと頑張りせなあかん！とはっぱをかける毎日です。

水谷和子

戦後復興のスローガンである「教育文化都市」を掲げた市と共に美術協会は発足した。創立会員の先生方は豊中の文化芸術の在り方を常々熱く語っておられた。豊中の作家を育て、豊中独自の芸術を発信する拠点が不可欠であるという考えから美術館建設促進運動は立ち上がった。訪欧したことのある先生がおっしゃっていたのは、海外では空港がある都市には必ず美術館があり、トランジットの時間などに気軽に立ち寄り、その土地の文化を図る目安になっているのだという。アートは特別なものではなく日常に寄り添うもので、感受性豊かな市民が暮らす街は高い幸福感を持つ。それが文化都市なのだ。現在、地方発の芸術祭はたくさんあるが、豊中はすっかり遅れをとってしまった。美術館建設は目的の象徴ではあったけれど、その志は今も色褪せない。豊中発の文化を創りあげるといふ、連綿と続く意思を受け継ぐことが70年を迎えた私たちの新たな決意になる。

米田整弘

豊中市展に初出品したのは、20才前でした。油彩20号の抽象作品で入選し、受賞もしました。それに気を良くしてしまい、翌年も出品したところ見事に落選。一緒に出品した友人と二人揃っての落選でした。ただ戻ってきた作品の裏には△印。△ということに少しホッとしたのを覚えています。自分なりに精一杯の作品と思っていたから。

市展会場では受賞者や会員の方々の絵に接し、改めて高いレベルでの作品であるということを実感しました。今は落選講習会がありますが当時はなく、落選の内容を知りたくて審査委員の先生宅へ50号の絵を持ち込み話を伺いました。今思うと若さを感じる話です。

以来、ありがたいことに入選や受賞をさせていただき、今に至っております。豊中市展で初めて公募展にチャレンジして以来、50年余り。共に歩いています。

落選にめげずに絵を描いていくことの大事さ、何度もチャレンジしていくことで磨かれていく様、市展の作品を見る度に感じさせてもらっています。



第62回展（2016年）での講習会（豊中市立文化芸術センター）

川上隆史

私が豊中市美術協会に入会させて頂いたのは、45年も昔のことです。当時訳もわからず兎に角市展に作品を持って来いと言われ、出品したところいつの間にか会員になっておりました。後に知ったのですが当時彫塑部の中心メンバーであった今村輝久先生と井上昭先生に推薦いただいていたのでした。そのお二人と松本勝彌先生のお三方の存在は非常に大きく、新米の私は市展に同じ立場で出品させて頂けることが有難く大いに緊張したものでした。

市展といえば忘れられないのは、展示や審査などが終わった後は必ず部のメンバーで居酒屋に繰り出し楽しい時間を共有したことです。また研修会を年一度実施し、井上先生の精緻な解説のもと色々な仏像を拝見させていただく中で私自身造形する者として様々なことを学びました。今はもう三人の尊敬する大先輩は鬼籍に入られました。今や私自身が当時の先生方と同年代になりましたが美術協会への貢献度では足元に及びません。忸怩たる思いの今日この頃です。

たてまつふみこ

豊中市展に初出品したのは2004年の第50周年展で、当時の部門名称は「彫塑」。作品は木材をベースに紙管をランダムに3~6cm幅の輪っか状に沢山切り出し、詰め詰めに接着配置しながら、有機的な形にして粘土成形した作品を出品。入選・受賞を重ねて会員になりました。以後、毎年開催の会員展にも出品。

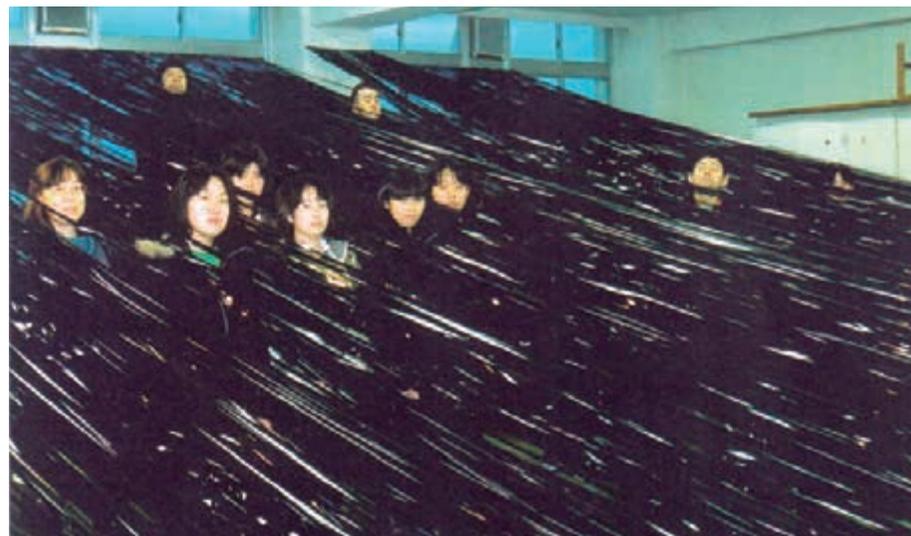
制作に関して、日常生活の中で生活廃材の端切れや集積材等、素材との葛藤や実験、試行錯誤しながらイメージと空間の関係を考察。ジャンルの垣根を壊して、インスタレーション、立体造形、デザインのような、絵画のような、曖昧な境界線。さらに色彩豊かなものに、社会・環境・循環など複合要素が絡み合っ、唯一無二の作品を創り続けています。

今後、美術展において彫塑・立体造形部は、ますます多種多様な素材と表現で、空間がより豊かなものになり、思いがけない発想・驚きが人の感性を豊かにし、出品者も鑑賞者も魅力を感じて頂ける美術展を次世代にバトンタッチできるよう、会員で切磋琢磨していきたいと思っています。

篠原克治

私は20歳の時に初めて日本画部門に出品し、それ以来時々デザイン部門などにも出品していました。その後本格的に出品しだしたのは33歳から（彫塑・立体造形部門）です。

いつも部門のイメージをおち壊す気持ちで出品しています。プラスチック工場の廃材を構成したり、ビデオテープをまき散らしたり、コンタクトレンズ容器に色水を入れて水たまりを作ったり、ラメや日本画で使う岩絵の具を使ったオブジェ、スポンジに着色した立体物、菊芋の茎、手作り偽物シリーズの金や銀等々、平面、立体を意識せず空間全体を考え彫塑・立体造形では使わないようなもので「こんな方法もあるんですよ。もっと自由に考えましょう。」まだまだ皆さん頭が固いようですので私はこのスタイルを続けていきます。



移動美術館 2005年 第18中学校での活動
ビデオテープによるインスタレーション作品 右端は作者の篠原さん

中川伊津美

豊中市展は今年70回展を迎えます。月並みな表現ですが、会員の皆様が駅伝のように襷を繋いできた年月に重みを感じます。阪神淡路大震災を乗り越え、現在は立派な会場で展示することが出来るようになりました。それを励みに応募なさる方もおられます。幅広い年齢層、初心者から熟練者までの多岐に渡るジャンルの応募があります。

一審査員としては先ず、真面目に制作されているかを審査します。加えて技術力・デザイン力・素材を生かす力の3点を総合的に判断しています。

力作を前に出品者と観覧者が楽しげに語り合っている光景は、我が事のように嬉しくなります。観覧者と出品者、また制作者同士をいかに繋いでいくかは市展の今後の発展の鍵となるかと思われれます。参加して良かった！と喜ばれる市展を目指したいと考えています。

渡辺雅夫

私が豊中市美術展に初めて応募したのが2002年の第48回展。当時美術展会場だった旧豊中市民会館が2010年に建て替えられることになり、別会場での開催が続きました。そして様々な構想を経て2016年にオープンした現在の文化芸術センターでの開催となり、本年70回展を迎えました。

資料によると1973年に豊中市美術館建設促進会が結成されたものの実現せず、1997年以降の文化総合施設基本構想でも服部緑地の一角を候補用地として建設が考えられていたようですが、これも実現には至りませんでした。

70回展を迎えるにあたり、当時これらの美術館構想運動に携わった先輩会員諸氏の思いを知り、受け継ぐことも市美術展の発展には必要ではないでしょうか。そして文化芸術都市豊中をより活性化させ、今以上に市民の皆様からの応援を得るよう、私たち会員も現状を打破する新しい視点での創作に励みたいものです。

花谷ふみ（仲田富美）

私が克明小学校低学年の頃、第一回豊中市美術展が講堂で開催されたことをうっすらと覚えています。時が経ち、この市展で私は七宝作品で第25回、26回、27回と連続で市長賞を戴きました。その時の賞品はなんと審査員の方々の作品で、得難い貴重な体験をさせて頂いたと思っています。

第25回展では、今村輝久氏の作品「キュービット」。天使の手に豊中市の花のバラを持った鋳物のレリーフ。

第26回展では、小林美春氏の作品「鳳凰」。少し緑青がかかった鈍色肌のかっちりとしたデザインされた鳥の造形。

第27回展では、初代羽原一陽氏作の「一輪挿し」。青緑、黄銅などの色が混ざるシックでどっしりと安定感のある造形。

当時の市長賞は他部門も同じ作品だったのかしら・・・？と気になります。同じ賞品をお持ちの方、ご一報をお待ちしています。



左から順に第25回展・第26回展・第27回展の賞品

片尾照子

豊中市展に初出品、初入選が確か私の場合、2007年だったと思う。ずいぶん遅いスタートである。

それまで、ずっと出品しなければと思いながら出品出来なかった。以来毎年出品し、4年くらい経って会員推挙をいただいた。この頃から制作する事が楽しく、どんどん新作をつくっていた。市展は会期中、講評がありとても勉強になる。出品者は熱心に聴いて質問もされ次回の作品に役立てておられる。市展に一般公募で出品していた頃は私もその仲間であった。

市展は今年70回展を迎える。70年を迎える迄には多くの先輩達が築きあげ、ご苦労下さったことと思う。後に続くわたし達はその思いを受け継いで行かなければならないと思う。

井上弘子

中学一年生の秋、先生の作品が出品されていると聞き同級生と市展に出かけました。初めて目にする様々な手法や画材で表現された作品の数々。美術の奥深さに触れた思いで、言葉に表せない程の感動を受けました。

大学の友人が受賞したことがきっかけとなり、見る側から見せる側へ憧れ出品を始めました。市展で入選すること、受賞すること、そして会員になること、一生懸命取り組める目標ができ制作活動の軸となりました。

「自分らしい表現とは」と自問自答しながら会員に加えていただき、早30年が経ちました。初心を忘れず、市展に訪れる方が鑑賞のひと時により時間を過ごしていただけますように、との願いを込めて、これからも作品制作を続けたいです。それが市展に携わり大切に今日まで支えて下さった方々や先輩のバトンをこれからの未来に繋いでいくことだと信じています。

二越としみ

初めて豊中市美術展の存在を知ったのは、地元の町内会館に貼られていたポスターでした。その時は地域の教室等に参加している皆様の発表の場なのだろうと思っていたのです。けれど知人の「絵を描いているなら出してみればいいのに」という一言から、誰でも応募出来る展覧会と知りました。なんと！自宅で眠っている趣味で描いた作品を持って行ってもいいのか！

元々漫画を生業としていたので自分の漫画作品を発表する場はありましたが、キャラクターのいない一枚絵を見て頂く事は皆無だったので、市展という機会に高揚した事を今も覚えています。幸いにも、自分では世に出した事のないカテゴリーの作品を認めて頂き、会員としての発表の機会も得る事になりました。貴重な一歩のきっかけを下された市展の、さらなる発展に微力ながらお力になれば幸いです。



第69回展市長賞表彰式

岡 慶泉

昭和三十七年に、夫・岡 蛭風と結婚し否応なしに書の道に入門し苦労して、やっと書き上げた作品を夫の勧めで豊中市展に出品して初入選した時の嬉しさは未だに忘れられません。

当時の作品展示は豊中市役所で行われ、諸先生方の作品にも出会い憧れを持つようになりました。

平成十七年に岡 蛭風が肺ガンで他界しました。残された私は共に勉強してきた蛭風門下の方々と、年に一度の発表会「新丹心会書展」を目標に研鑽を続けて参りました。豊中市美術協会の会計のお仕事にも協力し、以前協会事務局であった市民ギャラリーのスタッフさんにも随分お世話になりました。

市展の魅力は、何と言っても地元で大作の発表が出来、洋画、工芸、デザイン、日本画、彫塑・立体造形。書。写真の展示が一堂に鑑賞出来ることです。今後、市民の方々が興味を持ってくださって、出品者が増え、鑑賞者が更に増えることを切に願っています。

秀島踏波

今年は豊中市美術展・豊中市美術協会が70年を迎える。創立当初、集まった人達の夢は如何なものであったらうか。

書の部門では、漢字と仮名だけでなく現代詩文・篆刻・刻字と表現のジャンルが広がってきた。又、時と共に豊中市以外の美術愛好家が市展に応募するようになり、賑やかな内容のある美術展になったことは誠に喜ばしいことである。更なる発展を期待したい。

久保田心耀

私が、豊中市美術展の「書の部」に公募出品したのは今から50年程前のこと。30才の頃には受賞が重なって会員に推挙されました。以来、豊中美術協会会員としての活動も40年以上になります。

この間、多くの書家の先生方、先輩諸氏、同僚の皆様方にはたいへんお世話になってきました。あらためまして感謝とお礼を申あげします。私の師は水嶋山耀先生です。大学書道科での指導教官でした。豊中市展出品も先生からのお勧めがキッカケでした。20代には西田王堂先生から励ましの言葉を頂きました。王堂先生は威風堂々の大人（たいじん）の風貌が魅力的な方で、当時若僧の私には全く近寄り難い大先生でした。今も先生のことは印象深く記憶に残っています。

書家TY氏は、「東洋の哲学というようなものを書の中へ入れようとした。易学、陰陽などを。」哲学者KT氏は、「位（くらい）を主とし陰陽を副とするのが東洋的造形である。」また書家TKY氏は「書を習う時には形は第二として筆意を学ぶ」と。

この三者の文を参考に、実技において実証することが私の仕事と考える今日此頃です。



1988年 秀島踏波さんの書「土」

守實直之

市美術展に応募するきっかけは、子供の成長記録である1枚の写真でした。潮騒の波紋が残る砂浜を長男と姪が駆けるある夏のふるさとの一コマです。美術展に係わっては、故天野竜一先生ら諸先生方のもとで美術展の一端をお手伝いし、近年では故奥野利郎先生、諸先輩方のご指導を頂き、美術展の開催に携わってきました。豊中市の美術文化の発展を願うものとして、作品を創る仲間が1人でも増え、美術展に出展されるよう願っています。美術協会会員数の減少、若年層の美術展の応募数減等にどの様に対応すべきかが問われています。この70回展を期に美術展記念賞など恒久的に若年層部門を創設し、美術展を活性化するため、予算化が必要とされます。今後、微力ではありますが美術展の発展に務めたいと考える次第です。

亀田喜代子

私達が美術展に関わるようになったのは、主人が脳梗塞のため離職した際、カメラを持って出歩くようになったことが切っ掛けです。その後、会員に推挙され他市展やコンテスト等に応募し、穏やかな日々が過ぎました。

主人が平成4年に心筋梗塞を発症し、バイパス手術を受けてからは健康の不安を感じ、私も一緒に出歩くことにしています。周りの人達や主人のアドバイスにより私も会員に推挙され、今日に至っています。今では写真の世界もネガフィルムからデジタルに変わり、より多くの人達が楽しめるようになりましたが、パソコンへの編集作業が要求されています。様々なジャンルで優れた多くの作品に応募されていて、観る楽しみも増えて来ました。これからも益々盛会になることを期待しています。

上岡正和

自然の姿に癒され、自然との触れ合い、人々の出会いに調和のとれることが私達の姿といえる。その自然の中で野鳥や木々、昆虫、魚と共に美しい光景が生まれ、カメラを向ける私たちは幸せであり、作品が生まれる。多くの被写体を見ることにより、いろいろな作品が出来、人々に私たちの作品を見ていただくことは大変幸せなことだ。まさしく私たちの人生であり、そのものだ。これから出来るだけ楽しく悔いなく生きよう！健康であれ！



第69回展の講評会

ARCHIVE 豊中市美術協会の歩み

みんか文化芸術祭 2012年（服部緑地内日本民家集落博物館にて）
大阪音楽大学の学生さんによる演奏会も開催。



設立60周年記念 2014年（ホテルアイボリーにて）
木村重信先生の講演会など、市役所、文化芸術連盟の皆様をお招きして開催。



サンマテオ日本庭園50周年記念
2016年

豊中市と姉妹都市提携をしているアメリカ カリフォルニア州のサンマテオの日本庭園50周年記念を祝って作品制作。



記念行事に参加の豊中市都市活力部 長坂次長（当時、右）
日本画部の藤森秀子さんの作品とジョー・ゴーサルズ市長（左）



第51回ギャラリー会員展 2023年
 1970年に始まった美術協会の会員展。
 2004年、豊中市美術協会発足記念会員展を豊中市立市民ギャラリーにて7部門7会期で開催。
 以降市民ギャラリーで毎年開催。



大阪大学医学部附属病院内での展示 2014年(工芸部)
 2012年に大阪大学医学部附属病院内に、患者の癒しの場を目指した展示スペースが設置される。同病院の要請を受け年6ヶ月程度の期間において各部門1ヵ月単位で作品を展示することになり、以降今日まで毎年展示している。

ギャラリーワークショップ 2012年(日本画部)
 豊中市立市民ギャラリーでの美術協会会員展では、会期中に不定期であるが、お申込み頂いた市民の皆さまを対象にしたワークショップも開催している。



三賞受賞者一覽

豊中市美術展 [第1回～第69回]

	部門	知事賞	市長賞	教育委員会賞	美術協会賞		部門	知事賞	市長賞	教育委員会賞	美術協会賞
第1回 1955年 (昭和30年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真		湯田 寛 川畑充彦 高田暁山 山田刀禰	石塚泰夫 木村順子 平松保城 江本勝谷 迎 正	堀口清良 山下清・和田延二・鈴木克身 堀口清良 梶谷明子・野口千代 吉田龍仙 井上 博・山岡新之介	第7回 1961年 (昭和36年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	森本林正	森垣芙起子 増田優子 井上 昭 川田和雄 中野隆嗣 小早川晴雲 木田信敏	中村博子 浅田美和子 土井一二三 横山満里子 大塩重義・土井恵子 田辺寛二	内山興亜 渋谷寿一 難波 博 数本瑛子・堀田嘉子 曾我青雲 上辻良一
第2回 1956年 (昭和31年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真		中村孝子 安田勝彦 大洞喜美子 武石静江 岡田米峰 畑喜与一		西井猶存 樋口一洋 榎 光泉	第8回 1962年 (昭和37年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	ジューン・ライトル	杉本勝三郎 小田敏明 赤尾千恵子 藤原聰至・今北紘一 梶 敏一 木村まさる	中村博子・林 隆生 河南 寿 土井一二三 大辻良子 上田芳夫・空 和子 鈴木忠夫	加藤富久子 小川理子 武曾静枝 数本瑛子 篠田聡泉 篠原暢男・上辻良一
第3回 1957年 (昭和32年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真		吉田和代 柴原富美子 南山浩一 武石静江 谷本鳳鳴 妹尾年保	福本郁子 猪俣和子 中村芳子 末崎典子 枅 光泉・岡 螢風 小西 昇	大内純子 片野守正・山口 勝 難波 博 辻 輝子 磯崎義雄・岡正一郎	第9回 1963年 (昭和38年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	武 哲夫	林 隆生 横田 剛 北田孝之 武曾静枝 今村喜代子 野口雅子 矢川和一	立花ひろみ 小川理子 田中建司 萩井守三 正本晶久 大塩重義 松井 尚	山田信保 京本三代・村上厚雄 岩本一守 多留利治 田島松琴 木村まさる
第4回 1958年 (昭和33年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	戸田章子	堀口清良 大竹英輔 辻本周右 上田万須 松本宏揮 畑喜与一	加藤富久子 岡谷 巖 武石静江 藤本四郎・石河富佐子 岡 螢風・中橋葉月 徳田嘉孝	城岸澄栄 原田 清 森本林正 末崎典子 上田鶴峰 上田利夫・小西 昇	第10回 1964年 (昭和39年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	千原正伍	林 隆生 角田武繁 北田孝之 萩井守三 斎藤正寛 上田芳夫 松井 尚	山田信保 横田 剛 房本義生 辻 豊 黒田忠公 近藤富久 道中 弘	山田 薫 畑田耕作・岡谷 巖 戸口ツトム 尾形久子 沖 青波 吉村栄吉
第5回 1959年 (昭和34年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	出口和雄	松 生勇 田中哲朗 樋口一洋 川田和雄 入江輝也 上田鶴峰 畑喜与一	林 隆生 近藤孝祥 難波 博 大田清子 片岡幽石・松崎佳子 木田信敏	内山興亜 辻田忠弘 辻 忠司 杉村 馨 河端康子 中橋葉月 上辻良一	第11回 1965年 (昭和40年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	北田孝之	山田信保 金成幸一 桐島正隆 西村典子 岩島憲治 宮脇順子 野菅原斌	斉藤裕子 栗山倭文代 森本裕子 市田恵美子 行田徳子・大塩重義 岡原 進	良本郁子 岡谷 巖 小田敏明 井野辺美枝子 正本晶久 黒田洋子 白神 昇
第6回 1960年 (昭和35年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	藤濤 進	白井桂香 柴田 操 増田正和 芳浦克子 黒田忠公 白山恵一 伊木九郎	森垣芙起子 増田優子 難波 博 上田千枝子 片岡幽石・中橋葉月 薦田勝男	中村博子 渋谷寿一 井上 昭 川田和雄 石原静香 壺井 宏 根来秋光	第12回 1966年 (昭和41年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	山田元次	山田信保 富田 清 平田辰治 西村典子 宮崎聖子 近藤富久 有馬正孝	久富悦子 中島克子 北田孝之 岩切義衛 宮本 武 木村恵子 白神 昇	北 栄子 宮田須賀子 松本全晏 山本昌宏 藤本隆司 中川春園 北元秀教

	部門	知事賞	市長賞	教育委員会賞	美術協会賞		部門	知事賞	市長賞	教育委員会賞	美術協会賞
第13回 1967年 (昭和42年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	森山 和	岡崎元彦 梅田 敏 桐島正隆 赤尾千恵子 今泉友華 稲生月界 末廣八太郎	川島輝子 安部健太郎 小林ヒサエ 汐見美代子 山口みち子 木村恵子 森谷道雄	久富悦子 蛭子愛香 平田辰次 岩切義衛 入江輝也 石原抱玉 山本昭宣	第19回 1973年 (昭和48年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	松井米三	吉田富美 石塚陽子 福家伸二 岩切義衛 赤阪浩美 小吹律子 戸村 慎	横田淑子 増田克彦 日俣吉晴 西浜 尋 天福雅章 都倉昭次	宇野 薫 陣内幸子 勝山美貴子 浅原千代治 上田暉子 真殿フクエ 神崎順一
第14回 1968年 (昭和43年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	角田洋子	山田 薫 楠田真子 青木克之 羽原眞之 宮崎聖子 榎 作子 秋山通代	富岡久美子 安部健次郎 岡村美智子 松本孝子 加藤丈夫 岩岡清香 寺下嘉一	岡崎元彦 栗本有康 野村正彦 羽原義秀 増田 裕 笹方小琴 大沢 浩	第20回 1974年 (昭和49年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	浅原千代治	横田淑子 津田仁子 向出幸子 梶川忠雄 白尾多薫 小吹律子 田沢正一	青樹靖子 出崎修吾 勝山美貴子 浅田恵美子 溝口和代 飯田 薫 松村修太郎	小松原敏子 増田充彦 林 宣子 西浜 尋 武藤栄子 安本鳳仙 神崎順一
第15回 1969年 (昭和44年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	加藤丈夫	富岡久美子 千葉綾子 岡本香子 羽原眞之 村田良子 笹方小琴 古川恵子	岡崎元彦 栗本有康 寺内スミ子 梅原公子 永谷 操 佐藤由紀子 大沢 浩	篠村一郎 長井正義 永峰康人 三浦和子 坂本恵子 藤田紫甫 小財大介	第21回 1975年 (昭和50年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	増田克彦	岩見かおる 津田仁子 林 宣子 浅田恵美子 石田将裕 飯田 薫 沢田之良	川嶋輝子 小野みつ子 永峰康人 中嶋真由美 星山幸子 山中輝子 森尾宗祐	水口璋子 西川紀美代 今村 巖 浜之上セツ 湯川光枝 山崎枝子 萩野勝己
第16回 1970年 (昭和45年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	羽原眞之	富岡久美子 栗本有康 羽原義秀 とよながのりひこ 一柳歌子 友田富美子	川嶋輝子 加藤信子・山柁恒子 凧 法門 松田真由美 辻万里子 小吹律子 山本益美	永岡和子 勝島燕美 岩井重良 吉井マスエ 菊池洋子 塩谷絹子 大高かほる	第22回 1976年 (昭和51年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	牧野宏子	川嶋輝子 三原 実 今村 巖 清水久夫 鶴谷文代 山本藍水 平岡 進	布施多美乃 山田正雄 山本玲子 西森初江 山下満智子 飯田 薫 宮下晴子	青樹靖子 西川紀美代 田中里枝 渡辺 涉 石田将裕 佐々木敏博 横井正明
第17回 1971年 (昭和46年)	日本画 洋画 彫塑 工芸第一部 工芸第二部 書 写真	古川恵子	武曾静枝 阿南元信 岩井重良 羽原義秀 菅田和義 西村美代子 秋山通代	横田淑子 宮本文子 黒田官次郎 武石和春 本迫照代 真野不二子 小財大介	織田文恵 勝島燕美・楠田真子 福塚陽子 辻 和男 秀島踏波 上田益夫	第23回 1977年 (昭和52年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	細木南子	高畠淑子 西川紀美代 中農美枝子 那須和子 吉野高夫 山本藍水 守實直之	長門綾子 日俣吉晴 今村 巖 宮本順子 岡本きよみ 能宗静江 水上久雄	青樹靖子 新谷隆夫 長谷川桂子 渡辺 涉 戸板静穂 豊田千代 金沢美奈子
第18回 1972年 (昭和47年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	東 芝外	武曾静枝 西川喜雄 近藤喜治 武石和春 加藤隆義 松原喜代子 古道克己	福屋正能 梶本 剛 日俣吉晴 黒田直恵 森地 正 大塩重義 都倉昭次	亀井明二 片木靖子 丸山 哲 宮崎聖子 宮本秀子 真殿フクエ 村上輝一	第24回 1978年 (昭和53年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	岩見かおる	汐見美代子 竹中香哉子 中農美枝子 武石勇二 和辻 保 西田戴丘 辻 俊明	古川恵美子 鎌谷卓之 清水典子 上中啓司 南 英子 能宗静江 藤倉良行	小川三保衣 寺本純子 日俣吉晴 大澤喜代子 椋田敏彦 久保田義一 池地 保

	部門	知事賞	市長賞	教育委員会賞	美術協会賞		部門	知事賞	市長賞	教育委員会賞	美術協会賞
第25回 1979年 (昭和54年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	田中美恵子	青樹靖子 竹中香哉子 富田和加子 仲田富美 加藤完治 栗原美和代 藤倉良行	服部晴子 越水ユリ 浅谷崇史 岩井典子 野上亜矢子 豊田千代 森 正利	古川恵美子 新巳千夫 田中里枝 結城千琇 幼まこと 高山和子 大山 忠	第31回 1985年 (昭和60年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	藤川明美	西田佳代 黒田徳子 石川 茂 井上キヨ子 牧浦美樹 梶 史碩 明河喜三郎	山中彩雅 廣瀬正明 村井 学 西田喜ぬ子 全徳治代 大石辰夫 山崎博之	古角みよ子 辻 泰子 岡野繁松 磯田好子 伊藤義則 宇野竹泉 好本 勲
第26回 1980年 (昭和55年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	一谷美成	服部晴子 三谷照男 永峰康人 仲田富美 幼まこと 有働茗光 守實直之	中村礼子 吉川政見 丸山 哲 越智真由美 橋本典子 真殿フクエ 梶田 修	小林 瑛 小森重生 木村慶子 西名紀子 吉田貴治 中島遊水 松井 迪	第32回 1986年 (昭和61年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	古角みよ子	瀬部明子 辻 泰子 安東章子 山本正人 山口ほづみ 有働茗光 勝野五銀	山本 実 森山 覚 村井 学 桜井一雄 澤理恵子 細川幸子 高島義和	北野井滋子 西村淳美 岡野繁松 坂井敏子 玉置良博 橋本美江 泉 保雄
第27回 1981年 (昭和56年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	岩井典子	伊藤喜一 光馬由久 渡辺利夫 仲田富美 秋山満雄 中島賀寿恵 藤井亀之助	古川悦子 増野博司 溝上里美 竹中里佳 間森ヒロミ 土屋燈明 高島義和	汐見美代子 秋元正志 黒田官次郎 中条元子 梶本勝則 真殿フクエ 木治 克	第33回 1987年 (昭和62年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	村井 学	岩淵佳代子 稲井誠一 渡辺義幸 山本正人 伊藤義則 植木千峰 丹羽徳之祐	杉邨ヤスエ 石田圭吾 田中美恵子 高橋文子 今井嘉七男 矢野友治 長久正子	澤井新介 山田一幸 安東章子 水町祐子 窪田健一 橋本美江 佐竹 宏
第28回 1982年 (昭和57年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	中西千恵	塩原洋子 小森重生 溝上里美 大澤喜代子 浅川初美 中川碧水 藤井克治	小林 瑛 杉本俊夫 中村純子 堤多恵子 樋口淳子 吉田楚光 笠松孝子	古川恵美子 増野博司 永峰康人 坂井敏子 花谷和昌 西原喜久枝 泉 保雄	第34回 1988年 (昭和63年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	田邊恵右	杉邨ヤスエ 蘭まゆみ 灰掛典子 黒田牧子 三成智子 岩井八重子 高島義和	野口文子 久保田八重子 吉永元一 山之上賀英子 窪田健一 栗栖芳樹 田村 茂	澤井新介 岸田慶子 葉多梵昌悦 水町祐子 今井嘉七男 矢野十母 宇都宮力夫
第29回 1983年 (昭和58年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	大澤喜代子	小石すず子 吉岡日出松 向井久美 杉野須紀子 井上直子 合原香紗 竹本賢一	山中彩雅 村田耕作 慶田紫都子 大慈弥申子 立花佳枝 豊田千代 藤井克治	福禰真理 岡藤寿美子 浅田孝子 古川治代 森下 郁 浅利猪一 長久正子	第35回 1989年 (平成元年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	福吉久代	佐々木園子 中村朝子 大野良平 狩山俊江 西出裕巳 中井正峰 中川まさ子	里見百合子 坂根光泰 田中美恵子 生田淑子 松葉美穂 原 衣子 大西喜久子	野口文子 大森良子 河北和美 古川治代 藤原純子 岩井八重子 田中 弘
第30回 1984年 (昭和59年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	古川悦子	福禰真理 加納秀雄 渡辺利夫 岸本絹江 牧浦美樹 上田霽花 森 正利	古角みよ子 石川典子 高井一史 黒田牧子 井上直子 藤井爽爽 松岡 進	山中彩雅 村上尚子 まついたかし 磯田好子 南 英子 辺 青風 湯川東介	第36回 1990年 (平成2年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	世一千鶴子	青木隆子 井手瑞子 田中美恵子 高橋波津子 西出裕巳 久保杏苑 田村 茂	岩淵佳代子 廣瀬正明 渡辺義幸 水野まゆみ 石塚桜子 高橋裕子 林 晃久	川隅富美子 児玉順平 藤 隆 上田隆子 松葉美穂 矢野十母 好本 勲

	部門	知事賞	市長賞	教育委員会賞	美術協会賞
第37回 1991年 (平成3年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	丸山紀世子	藤佐和子 施 建 渡辺善幸 水野まゆみ 齊喜慶三 空野昭枝 清水明彦	国次千恵子 高石良子 藤 隆 井手津久雄 井上弘子 橋本史子 馬場昭夫	片岡繁美 吉住能子 田中美恵子 増田節子 佐孝時子 矢野十母 森重富夫
第38回 1992年 (平成4年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	佐孝時子	国次千恵子 安達知子 大野良平 井手津久雄 葉木佳子 岡山明子 馬場昭夫	松元文子 長岡正義 森野政順 井上楊彩 池田昌子 原 衣子 水谷康夫	丸山紀世子 文田静枝 森野政順 細見有香 藤間由紀 浜中節子 小佐田祥司
第39回 1993年 (平成5年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	吉住能子	大塚重則 五島富江 木島賢治 井上楊彩 下村愛子 久保杏苑 野村花子	上岡和枝 上野カス工 渡辺義幸 松本久子 杉本峰男 原田美代子 松岡 進	戸田末子 谷繁幸俊 東野旭陽 古川治代 西野まどか 山田扇華 清水明彦
第40回 1994年 (平成6年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	高野暢子	上岡和枝 生田公昭 渡辺義幸 細見有香 小柳美樹 原田美代子 大西喜久子	松尾操子 田中二三子 藤 隆 森岡 景 中家妙子 東野光輝 河井晋一	曳野愛子 大森良子 矢野義夫 松田隆晴 鈴木亜土奈 橋本史苑 岩田靖彦
第41回 1995年 (平成7年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	大森良子	黒谷智子 村井紳浩 矢野義夫 古川治代 河本年弘 楠本彩黄 西田義彦	曳野愛子 坂田政男 渡辺義幸 天野カネ子 篠原克治 田中冬樹 石田マリ子	戸田末子 高石良子 福吉与享 細見有香 北畑光晴 岡 慶泉 井上愛子
第42回 1996年 (平成8年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	羽里吉弘	曳野愛子 武田欣也 柴田芳弘 吉田全子 山内敏也 長谷川果園 水谷康夫	片岡繁美 小林鈴子 矢野義夫 石黒令子 山田英里子 楠本彩黄 小西 昇	上田和子 田中二三子 藤 隆 田淵美代子 西野成生 岡 慶泉 津田初子

	部門	知事賞	市長賞	教育委員会賞	美術協会賞
第43回 1997年 (平成9年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	表西一光	田中章夫 澤田理恵子 矢野義夫 齊藤文夫 川添美貴 楠本彩黄 西村知津子	片岡繁美 岸田慶子 高木 進 奥野多佳子 大谷晃代 池田雅芳 金市ヒデ子	福井知得子 松田伴子 福吉与享 坂本裕子 内田洋平 片岡法子 西口 宏
第44回 1998年 (平成10年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	高野暢子	北嶋泰子 両角澄子 木島賢治 高橋文子 内田洋平 池田雅芳 石田寿太郎	松尾操子 立花和子 宮地一喜 坂口初子 養父志保 片岡法子 岸田清子	勝部雅子 能丸督之 奥田崇美子 島上三恵子 重久直美 田中冬樹 西本 宏
*第45回以降知事賞はなくなりました					
	部門	市長賞	教育委員会賞	美術協会賞	
第45回 1999年 (平成11年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	上田和子 能丸督之 佐奈木茜 山下 毅 鈴木康史 高橋昌子 隅田行勇	竹山慶次 両角澄子 藤 和子 森 優子 加藤由美子 藤原脇子 野村敬次郎	英 洋子 松村真左子 奥田崇美子 石橋美津子 高木裕美 浜中節子 岸田清子	
第46回 2000年 (平成12年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	吉田実代 松村真左子 井上圭三 山下 毅 加藤由美子 高橋昌子 椴谷照夫	青木美津子 石野雅子 佐奈木茜 石野みきよ 淡路谷朋子 東 芳川 上岡正和	黒谷智子 白倉智子 小野正人 石橋美津子 金子亜矢 田中冬樹 金市ヒデ子	
第47回 2001年 (平成13年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	竹山慶次 篠崎裕子 田中和之 宮村悦子 鶴沼由加 脇村良子 亀田政彰	高見陽子 土橋素子 辰巳忠良 石野みきよ 山上憲一 東 芳川 金市利昭	里見百合子 荻野義男 伊藤幸代 齊藤文夫 西嶋 葵 日 高技 津田初子	
第48回 2002年 (平成14年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	高見陽子 見戸智子 篠原克治 石橋美津子 岡嶋亜裕美 入江華紅 本郷行道	北嶋泰子 紫垣郁子 酒向克典 淡路谷朋子 法野優子 荒堀 勉	田村洋子 高野暢子 西村淳美 吉村 歩 大喜多潤子 舛谷圭一	

	部 門	市 長 賞	教育委員会賞	美術協会賞		部 門	市 長 賞	教育委員会賞	美術協会賞
第49回 2003年 (平成15年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	福田浩之 小松俊子 小瀧幸彦 領家咏子 山上憲一 法野優子 伊井克雄	佐藤勝義 吉野芳子 田中和之 酒向克典 金子亜矢 入江華紅 佐藤浩司	梶本紀子 松田美和子 篠原克治 大西恭子 市山千尋 太田悠月 奥村幸子	第55回 2009年 (平成21年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	大島里子 米岡よう子 水野千秋 渡辺雅夫 片尾照子 時崎賀世子 古川光子	濱 道治 植村 衛 井上時子 半田裕哉 森田 純 中尾祐次郎 加藤泰典	竹内峰子 竹中豊秋 笠井くみ子 森本節男 内だまさる 野村長子 廣瀬忠弘
第50回 2004年 (平成16年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	相沢喜美子 吉野芳子 上田三貴子 長岡まり子 松田聖子 塚本虔白 亀田政彰	佐藤勝義 植村 衛 今川廣行 下村淳美 岡嶋亜裕美 太田悠月 開田春子	中山美代子 松田美和子 浅野雄太 宮村悦子 金子亜矢 中山真知子 岡田秀雄	第56回 2010年 (平成22年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	落合良江 渡部春樹 岡本 翠 森本節男 坂東瑠美 村上翠鈴 富田好久	大島里子 米岡よう子 児玉 泰 坂本裕子 片尾照子 松本君子 星 年子	濱 道治 亀井恵美子 細川忠夫 冢永リ工 森田 純 山田秀園 岩 晃
第51回 2005年 (平成17年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	増田美津子 松田伴子 松尾勇祐 大西恭子 金子亜矢 酒井優子 江角 陸	福井知得子 小松俊子 嶋上敏幸 倉岡 静 福田景子 西山華泉 西本 宏	梶本紀子 牧野みやこ 奥 康信 宮村悦子 藤原栄子 大西浩司 松田 健	第57回 2011年 (平成23年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	水野文恵 植村 衛 細川忠夫 冢永リ工 菅井茂樹 有澤溪翠 廣瀬忠弘	山田治則 井垣一子 竹村 弦 中津靖子 石田 貢 桢倉加津 森田絹子	川添安洋 長岡桂子 上田勝広 堀 晶恵 赤塚幾久子 西岡千恵子 田中利江
第52回 2006年 (平成18年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	前野民子 櫻井 聡 矢原繁長 森 優子 福田景子 三浦智江子 久志本洋子	中山美代子 植村 衛 たてまつふみこ 下村淳美 阪田 博 松本君子 舛谷圭一	斉藤けい 土橋素子 井上一郎 廣瀬一彦 徳河汎愛 安田彩華 藤田裕二	第58回 2012年 (平成24年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	川添安洋 川崎真実 石山裕果 堀 晶恵 赤塚幾久子 國枝将子 山根輝昭	松井秀子 高萩典子 小河原國弘 中津靖子 阪田 博 牧野孝明 亀田喜代子	神木千鶴 大西綾子 Everington Simon 上井 学 池崎凌一 和田英翠 勝瀬 均
第53回 2007年 (平成19年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	相沢喜美子 奥田洋子 西村大喜 坂口初子 松田聖子 西山華泉 田耕若一	前野民子 水谷和子 矢原繁長 領家咏子 篠原理恵 村上翠鈴 久保田肇	村上二三子 杉藤 翼 笠井くみ子 長門幸子 内だまさる 山田秀園 小井手久男	第59回 2013年 (平成25年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	狩野悦子 川崎真実 岩本雅晴 西村昇平 四至本浩二 西岡千恵子 山川弘志	門川浩子 杉村まゆみ 神山美登里 沼田博和 早川博唯 和田英翠 亀田喜代子	松井秀子 後藤昌憲 Ms&Mr シュウ 柴野雅美 森田 稔 有澤溪翠 板坂知子
第54回 2008年 (平成20年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	前野民子 水谷和子 西 黎子 半田裕哉 末次祐二郎 能丸澄子 千布正人	川添安洋 篠崎裕子 井上時子 冢永リ工 藤原栄子 國枝良弘 馬淵弘子	竹内峰子 近山幸子 たてまつふみこ 森下二三枝 福原萌美 荒木慧子 廣瀬忠弘	第60回 2014年 (平成26年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	井関 猛 細川真歩 岩本雅晴 奥野多佳子 阪田 博 牧野孝明 山本 彰	横山勇生 松本繁文 Ms&Mr シュウ 岸川博人 片山智子 日高紫泉 水野道彦	神木千鶴 浦田道数 神山美登里 山本佐代子 森田 稔 大平ふみ子 大江淑之

	部 門	市 長 賞	教育委員会賞	美術協会賞		部 門	市 長 賞	教育委員会賞	美術協会賞
第61回 2015年 (平成27年)	日本画 洋画 彫塑 工芸 デザイン 書 写真	会見貫太郎 藤田圭二 神山美登里 尾屋貴文 竹中豊秋 中村和扇 毛利秀明	神木千鶴 アライヤスオ 岩本雅晴 中川欽津子 池上 眞 荒木慧子 東川征一郎	門川浩子 吉田洋子 Ms&Mr シュウ 佐藤光子 橋本 豊 浦上博子 荒川惣平	第67回 2021年 (令和3年)	日本画 洋画 彫塑・立体造形 工芸 デザイン 書 写真	池上祥平 西山俊朗 蛭川茉南 生田淑子 吉田まこ 畑中美和子 三澤和恵	高橋義美 平野正代 黄野俊明 山根町子 中野真理子 増原順子 数藤守治	遠山泉美 中江左知代 穴戸あゆみ 神谷俊彰 中島康治 加藤舒暎 上西達郎
第62回 2016年 (平成28年)	日本画 洋画 彫塑・立体造形 工芸 デザイン 書 写真	石井きよ子 なかつみつこ 高島照久 嶋本博文 池寄凌一 米山華北 板坂知子	水野文恵 西山俊朗 岸上奈生 小川光延 森岡靖枝 黒田香奈 加藤泰典	門川浩子 渡邊淳子 岡本 翠 遠藤育美 早川博唯 今井葉舟 森 睦夫	第68回 2022年 (令和4年)	日本画 洋画 彫塑・立体造形 工芸 デザイン 書 写真	内田育子 藤田道枝 安田正裕 古谷一規 高木直行 和田林黎光 南 洋子	久保博義 盛貴恒夫 入口卓也 高田賢三 二越としみ 日野三恵 五十嵐由紀枝	川野慶子 木村直子 内海慶子 秦 淳子 中野真理 奥村珠枝 矢敷雅子
第63回 2017年 (平成29年)	日本画 洋画 彫塑・立体造形 工芸 デザイン 書 写真	日野美鳥 稲垣恭子 藪下 実 小川光延 池上 眞 今井葉舟 安田二郎	狩野悦子 三木 蘭 岸上奈生 遠藤育美 杉本一生 大鹿庭華 菅原和子	中村好子 木脇美香 河合雅代 嶋本博文 吉田まこ 北濱志津子 中村 功	第69回 2023年 (令和5年)	日本画 洋画 彫塑・立体造形 工芸 デザイン 書 写真	蒔野加代子 平野正代 蛭川茉南 秦 淳子 吉田まこ 郡 直己 藤川正規	川野慶子 奥村 誠 和田元子 吉田富美子 古谷一規 木口真由美 羽田範子	松本敏子 木村直子 安田正裕 古谷一規 高木直行 油井峽月 小澤廣雄
第64回 2018年 (平成30年)	日本画 洋画 彫塑・立体造形 工芸 デザイン 書 写真	佐藤福男 松田美和子 水野千秋 佐藤光子 佐々木翔 安井敦子 長屋行博	古田智子 阿部敏子 永山十美子 岸川博人 古谷一規 日高紫泉 小野仁彦	中村好子 中川美子 竹中恭子 菅沼秀行 福岡礼子 奥村珠枝 田中利江	第65回 2019年 (令和元年)	日本画 洋画 彫塑・立体造形 工芸 デザイン 書 写真	久保博義 山本有美 西 黎子 倉淵奈千子 小林雄次 和田林黎光 田中利江	舩井移津子 渡邊淳子 竹中恭子 岸川博人 末次祐二郎 堤 恭子 小野仁彦	古田智子 鈴木政子 永山十美子 生田淑子 佐藤福男 中島光薫 森本正幸
第66回 2020年 (令和2年)	日本画 洋画 彫塑・立体造形 工芸 デザイン 書 写真	中川理代 満仲早紀 水野千秋 高田賢三 田内康雄 中島光薫 田中富士夫	高橋義美 村井 修 井村絢子 山根町子 中澤 唯 桝倉加津 立岩賢治	池上祥平 大寺久男 司城裕大 岸川博人 小林雄次 宮崎岑子 佐藤輝明					

年表

豊中市美術展			豊中市美術協会	
	9月	市民文化の向上のための市展の開催が構想される		
1955年 (昭和30年)	11月23日～11月27日	第1回展 豊中市美術展開催(展示数288点) 会場 市立克明小学校講堂 以降、第13回展まで同校にて開催(第8回以外) 物資不足の時代で展示パネルもなく“よしず”を張るなど苦心の 展示を行った	8月	豊中市美術協会設立準備委員会開催(委員30名) 豊中市美術協会発足会式となる第1回総会開催 初代会長に西村純平就任 事務局を市立中央公民館に置く
1956年 (昭和31年)	11月23日～11月27日	第2回展 市制20周年記念		
1957年 (昭和32年)	11月23日～11月27日	第3回展		
1958年 (昭和33年)	11月22日～11月26日	第4回展		
1959年 (昭和34年)	11月21日～11月25日	第5回展 大阪府芸術祭参加		
1960年 (昭和35年)	11月26日～11月30日	第6回展 大阪府芸術祭参加		
1961年 (昭和36年)	11月23日～11月27日	第7回展 大阪府芸術祭参加／市制25周年記念	11月	第2代会長に高木清就任
1962年 (昭和37年)	11月23日～11月27日 11月24日	第8回展 大阪府芸術祭参加／新庁舎竣工記念 会場 新庁舎6階 記念講演開催(京大教授井島勉「美と教養」)		
1963年 (昭和38年)	11月29日～12月3日	第9回展 大阪府芸術祭参加		
1964年 (昭和39年)	11月21日～11月25日	第10回展 姉妹都市サンマテオ市(アメリカ)より特別招待作品展示(19点)		美術協会創立10周年
1965年 (昭和40年)	11月20日～11月24日	第11回展		
1966年 (昭和41年)	11月19日～11月23日	第12回展 市制30周年記念		
1967年 (昭和42年)	11月25日～11月29日	第13回展	10月	事務局を社会教育課内に移す
1968年 (昭和43年)	11月7日～11月11日	第14回展 市民会館落成記念 会場 市立市民会館 以降、同会場にて開催		
1969年 (昭和44年)	11月20日～11月24日	第15回展 姉妹都市サンマテオ市(アメリカ)より特別招待作品展示(1点)		
1970年 (昭和45年)	11月19日～11月23日	第16回展		
1971年 (昭和46年)	11月18日～11月22日	第17回展 市制35周年記念		
1972年 (昭和47年)	11月2日～11月6日	第18回展 この年より日本画・洋画・彫塑・工芸・デザイン・書・写真の7部門とする	6月 8月25日～8月27日	第3代会長に堀口清良就任 第1回美術協会会員展開催 会場 中央公民館
1973年 (昭和48年)	6月 11月1日～11月5日	美術館建設促進会結成される 第19回展	6月22日～6月24日	第2回美術協会会員展開催 会場 市立市民会館 以降、第32回まで同会場で開催(第6・7・15回以外)

豊中市美術展			豊中市美術協会	
1974年 (昭和49年)	10月31日～11月4日	第20回展	1月	美術館建設促進会署名活動を展開
			7月	80,920名の署名を添え、市及び市議会に美術館早期建設を要望
			8月30日～9月1日	第3回会員展
1975年 (昭和50年)	10月30日～11月3日	第21回展		
1976年 (昭和51年)	10月28日～11月1日	第22回展 姉妹都市サンマテオ市(アメリカ)より特別出品(1点)	8月8日～8月10日	第4回会員展
1977年 (昭和52年)	11月3日～11月7日	第23回展	3月3日～3月5日	第5回会員展
1978年 (昭和53年)	11月2日～11月6日	第24回展	3月1日～3月20日	第6回会員展 会場 市立文化会館
1979年 (昭和54年)	11月1日～11月5日	第25回展	3月7日～3月26日	第7回会員展 会場 市立文化会館
1980年 (昭和55年)	10月30日～11月3日	第26回展	3月26日～3月28日	第8回会員展
1981年 (昭和56年)	10月29日～11月2日	第27回展	3月12日～3月15日	第9回会員展
1982年 (昭和57年)	10月28日～11月1日	第28回展	3月11日～3月14日	第10回会員展
1983年 (昭和58年)	11月3日～11月7日	第29回展	3月10日～3月13日	第11回会員展
1984年 (昭和59年)	11月1日～11月7日	第30回展 第30回記念誌発刊 会期中の11月4日記念式典にて講演を行う	3月15日～3月18日	第12回会員展
1985年 (昭和60年)	10月31日～11月4日	第31回展	3月14日～3月17日	第13回会員展
1986年 (昭和61年)	10月30日～11月3日	第32回展 市制施行50周年	3月13日～3月16日	第14回会員展
1987年 (昭和62年)	10月30日～11月3日	第33回展	3月5日～3月8日	第15回会員展 会場 中央公民館
1988年 (昭和63年)	11月3日～11月7日	第34回展	3月3日～3月6日	第16回会員展
			6月	第4代会長に安藤純就任
1989年 (平成元年)	11月2日～11月6日	第35回展	3月2日～3月5日	第17回会員展
1990年 (平成2年)	11月1日～11月5日	第36回展	3月8日～3月11日	第18回会員展
1991年 (平成3年)	11月1日～11月5日	第37回展	3月7日～3月10日	第19回会員展
1992年 (平成4年)	10月30日～11月3日	第38回展	3月5日～3月8日	第20回会員展
1993年 (平成5年)	11月10日～11月14日	第39回展	3月4日～3月7日	第21回会員展
1994年 (平成6年)	11月3日～11月7日	第40回展	3月3日～3月6日	第22回会員展

	豊中市美術展		豊中市美術協会	
1995年 (平成7年)	11月3日～11月7日	第41回展	3月2日～3月5日	第23回会員展
1996年 (平成8年)	11月1日～11月5日	第42回展	2月29日～3月3日	第24回会員展
1997年 (平成9年)	10月31日～11月4日	第43回展	2月27日～3月2日	第25回会員展
1998年 (平成10年)	10月30日～11月3日	第44回展	12月11日～12月14日	第26回会員展
1999年 (平成11年)	10月30日～11月3日	第45回展	3月4日～3月7日	第27回会員展
2000年 (平成12年)	11月3日～11月8日	第46回展	3月2日～3月5日	第28回会員展
2001年 (平成13年)	11月3日～11月7日	第47回展	3月1日～3月4日	第29回会員展
2002年 (平成14年)	11月2日～11月6日	第48回展	2月28日～3月3日	第30回記念会員展
2003年 (平成15年)	11月1日～11月5日	第49回展	3月6日～3月9日	第31回会員展
			4月	設立された豊中市文化芸術連盟に美術団体として参加
2004年 (平成16年)	11月1日～11月5日	第50回展 第50回記念誌発刊	11月	第1回文化芸術祭に参加。以降、毎年参加 会場 アクア文化ホール
			5月	豊中市美術展第50回記念事業として会員展開催(7部門7会期) 会場 市立市民ギャラリー 以降、毎年各部門別に同会場、7部門7会期にて開催
2005年 (平成17年)	10月29日～11月3日	第51回展	7月	第32回会員展
			8月～12月	第33回会員展(日本画、洋画、彫塑、工芸の4部門)
2006年 (平成18年)	10月28日～11月1日	第52回展 市制70周年	5月	第5代会長に田中健三就任
			9月	豊中市美術協会会報誌創刊 以降毎年発刊
2007年 (平成19年)	11月3日～11月7日	第53回展	8月～平成19年1月	第34回会員展(書、デザイン、写真の3部門)
			6月～平成20年1月	第35回会員展
2008年 (平成20年)	11月1日～11月5日	第54回展	4月	事務局が豊中市人権文化部芸術室(当時)に移る
			5月	第6代会長に有本亮正就任
2009年 (平成21年)	10月31日～11月4日	第55回展	7月～12月	第36回会員展
			3月	第37回会員展
2010年 (平成22年)	10月29日～11月2日	第56回展	7月～平成23年1月	第38回会員展

豊中市美術展			豊中市美術協会	
2011年 (平成23年)	10月～11月	第57回展 オープンイベントとして大阪大学総合学術博物館 館長 橋爪節也氏による基調講演開催 会場 公募の部を市立ローズ文化ホール、会員の部を大阪空港中央ブロックにて開催(市立市民会館が老朽化で建て替えのため)以降、第59回まで同会場にて開催	7月～平成23年1月	第39回会員展
2012年 (平成24年)	10月～11月	第58回展 友好都市島根県隠岐の島町より写真作品出展	5月	第7代会長に奥野利郎就任 大阪大学医学部附属病院内に展示スペースが開設され、同病院の要請により年6ヶ月各部門ごとに作品展示。以降、毎年展示。
			7月～平成25年1月	第40回会員展
2013年 (平成25年)	10月～11月	第59回展	11月	会員有志による「みんか文化芸術祭」開催 会場 日本民家集落博物館
			5月～8月	野村証券豊中支店開設20周年記念企画展
2014年 (平成26年)	10月～11月	第60回展 公募の部と会員の部を2期に分けて開催 会場 市立ローズ文化ホール	8月～平成26年3月	第41回会員展
	10月	豊中市美術展第60回記念事業「とよなかの作家たち展」開催 会場 市民ギャラリー 以降、2019年まで同会場にて開催	7月～平成27年2月	第42回会員展 設立60周年記念「感謝のつどい」開催 記念講演開催(美術史家・木村重信氏「曲り角のパブリックアート」)
2015年 (平成27年)	10月～11月	第61回展 第60回展と同じ形式、同じ会場にて開催	12月5日～7日	沖縄文化祭参加(兄弟都市提携40周年記念として)
2016年 (平成28年)	11月4日～11月8日	第62回展 彫塑部門を彫塑・立体造形部門に名称変更 会場 市立文化芸術センター 以降、現在まで同会場にて開催	7月～平成28年3月	第43回会員展
			7月～平成29年1月	第44回会員展
2017年 (平成29年)	10月27日～10月31日	第63回展	8月	姉妹都市サンマテオ市(アメリカ)の記念行事に作品展示
2018年 (平成30年)	10月～11月	第64回展 7部門を前期と後期の2期に分けて開催 以降、第69回まで同じ形式にて開催	7月～平成30年1月	第45回会員展
2019年 (令和元年)	11月	第65回展	7月～令和元年1月	第46回会員展
2020年 (令和2年)	11月	第66回展	7月～令和2年1月	第47回会員展
2021年 (令和3年)	11月	第67回展	7月～令和3年1月	第48回会員展
			5月	第8代会長に畑中弄石就任
2022年 (令和4年)	11月	第68回展	11月～令和4年1月	第49回会員展
2023年 (令和5年)	11月	第69回展	11月～令和5年1月	第50回会員展
2024年 (令和6年)	11月	第70回展 7部門を1期制にて開催 豊中市美術展第70回記念としてシンポジウム、企画展開催。記念誌発行。	11月～令和6年2月	第51回会員展

編集後記

豊中市美術展が第70回展、人生でいうところの「古希」を迎えることになり、第30回展、第50回展記念誌に続き、20年振りに発行する運びとなりました。冊子の編集、制作にあたり、ご協力いただきました豊中市美術協会会員、関係各位には厚く御礼申し上げます。

今回の編集では、特に第50回展以降を中心に集めた様々な写真や年表などの資料を整理したり、市展のこれからについての座談会も開いたりする中で、これまで運営に携わって頂いた多くの先輩諸氏への思いを馳せるとともに、同じく設立70年を迎えた豊中市美術協会の原点を見つめ直す機会となりました。

この70年という節目も一つの通過点です。この記念誌のテーマでもある「これから」を見据え、市民の皆様のご支援を頂けるよう市と美術協会がしっかり連携を組み、豊中市における文化芸術活動をさらに進展させたいものです。

第70回記念誌準備委員会

豊中市美術展第70回記念誌

表紙デザイン 井崎敏彦

企画・編集 第70回記念誌準備委員会

藤森秀子・水谷和子・大野良平
たてまつふみこ・渡辺雅夫・早川博唯
畑中弄石・久保田 肇

発行 豊中市美術展実行委員会
〒561-8501 豊中市中桜塚3-1-1
豊中市都市活力部魅力文化創造課内

発行年月 令和6年10月

印刷 やまかつ株式会社



豊中市美術展
第70回記念誌